

構造デザインにおける作家性：

金箱温春講演会 『“ENDEAVORS IN STRUCTURAL DESIGN”：構造建築家の世界』

大嶽 陽徳〔博士課程3年〕

冒頭で、東京スカイツリーと東日本大震災の被災地の写真を対比させて、新たなデザインの追求と安全性の確保の双方が構造設計には必要であると述べ、それを踏まえて講演を始められた。講演の前半では、現代の構造設計が成立してきた経緯を、古典建築から始まる長い建築の歴史の概略を辿りながら語られ、後半では、大学院を卒業し横山建築構造設計事務所で働き始めた70年代から自身の事務所を設立し働いてこられた現在までの経験を、建築家や他の構造家とのユーモラスなエピソードを交えながら語ってくださった。そのエピソードには、長きにわたって建築家と向き合い、時には衝突しながらも、真摯に構造設計に取り組んでこられた姿勢が現れていた。そして、事務所設立後に設計された代表的なプロジェクトを複数の設計のテーマに整理して解説し、個々のプロジェクトを横断して自身の設計活動にストーリーを見いだすことの重要性を説いた。

個人の事務所を構える構造家の仕事の多くは、建築家からの依頼によるものである。建築を生産する社会の仕組みのなかでは、建築家とクライアントの関係と同様な構図が、構造家と建築家の間にも成立しているとも言える。それを前提としながらも、自身の設計活動にストーリーを見いだす作業は、建築生産の仕組みのなかでの構造家のあり方を相対化し、構造デザインの表現者としてひとりの自律した作家を目指す取り組みになるのではないだろうか。東日本大震災により社会の基準が揺らいでいるなか、個別のプロジェクトを越えて自身の設計活動に一貫した思想を見いだそうとする「建築構造家」としての姿勢は、建物の安全性や耐久性を追求することとは別の水準の、構造設計者が社会のなかで共感を得る仕事をするために必要な取り組みなのではないだろうか。



写真：講演会の様子